

教職支援センター



ニューズレター

巻頭言

【ホリスティックな教育/ケアをめぐる】

2017年6月18日、日本ホリスティック教育/ケア学会が創設されました。この学会は、教育やケアへのホリスティックなアプローチ、および、ホリスティックな志向を持つ教育やケアに関する研究を行うことを目的としています。

「ホリスティック(holistic)」という概念は、20世紀末に英語圏で生まれたもので、日本語に訳される際には「全体的な」と表現されることが多いです。ただし、そこでの「全体」は、個を塗りつぶす(全体主義的な)全体ではなく、個が個として尊重されながら、つながりを持ち、バランスをとり続けていくような「全体」を意味しています。そして、この「全体」を考える上で、社会や文化、自然といった、水平方向に開かれた「ホールネス(wholeness)」の視点と、「いのち」の根源にまで垂直方向に深められた「ホーリネス(holiness)」の視点とが大切にされています。

この学会の立ち上げには、私自身も創設呼びかけ人として関わってきたのですが、その歩みのなかで、とくに長く議論したのが、学会名称の「ホリスティック教育/ケア」という表記でした。

学会長である吉田敦彦氏の整理にもあるように、本来、教育とケアは不可分の関係にあるものと言えるので(そのことは、近年、幼児教育の分野で使われるようになってきており、UNESCOも紹介している“Edu-care”という用語にも現れています)(吉田敦彦ほか編2012『教育福祉学への招待』、せせらぎ出版、7-12頁)、この意味では、あえて「教育」と「ケア」を両方明記することは、かえって教育とケアの溝を深くするのではないかとといった疑問が投げかけられました。また、その論法で言うならば、そもそも教育もケアもホリスティックな営みであるのに、わざわざ「ホリスティックな」教育やケア、と強調することは必要なのか?という問いも出されました。

その上で、この学会は、上記の少し変わった名称を名乗っての創設を選びました。それはやはり、現在、「教育」と見られている営みと、「ケア」と見られている営みのそれぞれが、分断して捉えられてしまっているのではないかと、という思いや、その双方から、ホリスティックな広がりや深まりが削ぎ落とされている現状がないだろうか、という問いが私達のなかにあったからだと思います。

「ホリスティック」という言葉を使わなくとも、教育とケアの連続性や、その水平方向、垂直方向への志向性を十分に含み込んだ実践や研究をしておられる方はたくさんいらっしゃいます。そうした方達が、自身の日々の取り組みを捉え直す際の参照枠組みとして、また、自身の教育観やケア観に何か足りないものがあると感じる方達が、その「何か」を問い直す際のきっかけとなるものとして、この学会での議論が提供できるものは多分にあるのではないかと期待しています。

着任してから5年目となり、信州の教育や暮らしに「ホリスティック」と呼べるところをたくさん発見しています。この土地から発信していけるものは何か、これからも模索していきたいと思っています。

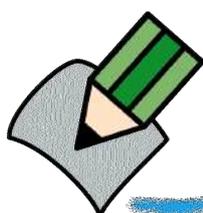


専任講師 河野 桃子

シリーズ 活躍する卒業生

教職支援センターの前身の教職教育部が発足して10年が経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

～ vol.1 工業高校 ～



静岡県立掛川工業高等学校
電子機械科 教諭

伊藤 圭亮 先生

(工学部電気電子工学科 2014年3月卒業)



私は、工業科の教員として、工業高校生に電気工学分野を中心に授業・実習を指導しています。

工業高校は、卒業後に就職を考えて入学してくる生徒が多く、就職指導が必要不可欠になります。日ごろの挨拶やマナーを始めとする生活習慣の指導、工業科目や実習による教科指導は、卒業後に社会人となることを見据えて行っています。

また、電気主任技術者などの国家資格や検定試験の指導も行っています。私自身も資格の勉強をすることが増え、学生時代以上に勉強していると実感しています。理工系学部で学ばれている学生さんは、在学中に資格やいろいろな分野の勉強をしておく方が良いのではないのでしょうか。特に、工業科の教員は、電気・機械・情報に限らずあらゆる分野の授業をします。私は電気が専門ですが、1年目のときは機械科目の授業を担当し、今ではシーケンス制御の実習も指導しています。技能検定の指導をしなくてはならないこともあります。教員は生涯勉強だなと痛感しています。

学級担任は電子機械科2年生です。担任としては2回目で、大分落ち着いてきました。初めての担任の時は、生徒指導に悩むことが多くあり、この指導で良かったのか、あの声かけは正しかったのか、あの時の生徒は何を感じ、何を考えていたのかと自問自答する日々でした。今後もずっと考え続けると思います。恵まれた環境で生活している生徒だけではなく、本当に様々な生徒がいるということを認識させられました。実際に教員として生徒と接すると、いろいろなことがあります。それにしっかりと向き合うための様々なスキルや知識、経験がまだまだ足りないと感じています。

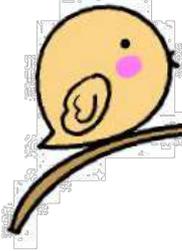
ただ教員になりたい、夢だからと声高らかに言うことは簡単です。私自身もそうでした。私は、まだまだ勉強し続けていきます。

最後に、私の教育理念の基盤を築いていただいた教職支援センターの諸先生方に、厚く感謝申し上げます。

長野県駒ヶ根工業高等学校
電気科 教諭

上野 文音 先生

(工学部電気電子工学科 2016年3月卒業)



私は、信州大学工学部電気電子工学科を卒業し、平成28年の4月から駒ヶ根工業高等学校電気科の教師として勤め始めました。

初めての教師としての学校生活は、授業に関しても、行事に関しても、分からないことが多く、周りの先生方に助けていただき、また指導していただきながらの毎日でした。

授業では、担当する教科をどのように教えたら生徒にとって分かりやすいのか、生徒に楽しみながら授業を受けてもらえるのかということについて考えさせられました。大学までは、教えてもらい、理解するところで終わっていた分野であるため、分かりやすく魅力的に伝えるということは考えたことがなく、とても難しいものでした。実際に授業を行ってみても、生徒の興味関心を得られなかったり、授業が計画通りに進まなかったりなど、課題が多く見つかりました。そんな中でも、生徒が「なるほど」や「そうなんだ」と言ってくれる瞬間は、とてもうれしく、そういう部分をもっと増やしていけたらと思いました。

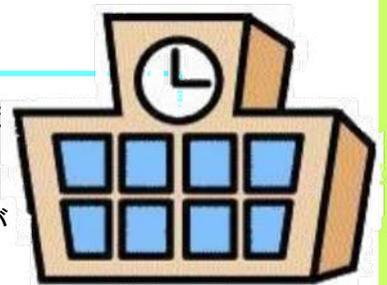
工業高校では、電気科の教師は電気科の生徒と1年生の授業を担当するため、他の科の生徒と接する機会はあまりないのですが、行事においては、普段あまりかかわりのない学年やクラスの生徒と共に活動をすることができました。多くの生徒と関わることができ、普段とは違う、その生徒の得意なこと、好きなことなど、いろいろな面を見ることができ、とても貴重な経験になりました。また、工業高校では、地元の企業に就職する生徒が多いため、地元での工場見学やインターンシップが盛んにおこなわれています。私も、生徒の引率として様々な企業に行かせていただき、工業系の企業について学ぶことができました。その他にも、私は去年、「はばたけ！高校生ものづくり女子ミーティング」という取り組みに参加させていただきました。現在、工業科の女子生徒の割合は工業高校生全体の7%であり、工業科の女性教員も工業科職員全体の7%というとても少ない人数です。はばたけ！高校生ものづくり女子ミーティングとは、そういった中で、女性同士で集まり、縦や横のつながりを作ろうという取り組みです。私も参加して、女性教員の先輩方に会うことができました。工業科の女子生徒や女性教員はまだまだ少ないですが、工業は女性でも活躍できる場だと思います。これから先、多くの女性に工業科の生徒や教員になっていただきたいと思います。

今年2年目を迎え、前年度の経験を活かし、前もって準備できたり工夫できたりする場面もありますが、まだまだ努力しなければならない事、知らない事も多く、これからも、先輩の先生方のご指導をいただきながら学んでいきたいと思っています。



今号では、工業高校で教育実践に励まれている卒業生のお二人から、現在の勤務校での様子を聞かせていただきました！

それぞれの勤務地で、専門性を活かしながら、日々、反省的実践を行うお二人の姿が頼もしいです。



各学部より 第五回: 繊維学部

信州大学繊維学部は、2016年の学部改組により4系9課程から4学科に再編されました。改組に伴いカリキュラムが一部変更され、取得できる教員免許の種類は学科・コースにより異なりますが、次の教員免許状が取得可能となっています。

■学部

先進繊維・感性工学科 感性工学コース、機械・ロボット学科、化学・材料学科、応用生物科学科

「中学校教諭一種免許状(理科)」、「高等学校教諭一種免許状(理科)」

先進繊維・感性工学科 先進繊維工学コース、機械・ロボット学科

「高等学校教諭一種免許状(工業)」

■大学院繊維学専攻

化学・材料分野 応用分子化学ユニット、応用生物学分野

「中学校教諭専修免許(理科)」、「高等学校教諭専修免許(理科)」

先進繊維・感性工学分野 先進繊維工学ユニット、機械・ロボット学分野

「高等学校教諭専修免許(工業)」

※当該専修免許状に係る一種免許状取得者のみ取得可能。

※生命医工学専攻は、「中学校・高等学校教諭専修免許(理科)」を取得可能。

教職課程に関する活動には、教職支援センター及び、教職科目の担当教員による多大なる支援と共に、地域との連携・協働が必要です。長野県・上田市教育委員会の方々をはじめ、県内外の中学校・高等学校での教育実習、上田市内の小中学校での教職実践演習、地域の介護・養護施設での介護体験等の受け入れにおいて、多くの地域の人々に大変お世話になっております。地域との連携には、大学側からの支援も重要で、歴史的に上田市が蚕糸業で栄えていたことから、学部教員によるカイコについての講演や、カイコの飼育支援を地域施設で実施しています。

教職科目の履修が大変であるため、途中で断念してしまう学生もおりますが、免許取得を希望・履修する学生は、概して学習意欲が高い傾向であり、免許取得後には大きな達成感を感じているようです。4年間の履修を経て、免許取得に至り、教育者として就職する学生は、毎年、一定数存在します。今後もきめの細かい丁寧な指導と支援をお願い致します。

(繊維学部 田中稔久)



教職支援センター4月～6月の動き

- 新入生への教職ガイダンス(4/5.6)、○高年次生への教職ガイダンス(各学部ごと4/3～10)、○CST講座開講(5/16)
- 長野県教育委員会との連携協議会(5/18)、○各教育委員会ならびに校長会への訪問(教育委員会:松本市(6/2)・上田市(6/1)・長野市(5/25)・伊那市(6/22)・南箕輪村(6/22)、校長会:松本市校長会・上小校長会・上水内長野市校長会・上伊那校長会)、○松本市教育委員会との連携交流会(6/2)、○CST養成プログラム実施委員会(6/20)
- 教員免許更新支援センター会議(6/20)、○教員免許支援センター運営委員会(6/27)

編集後記

だんだんと夏らしい天気の日が増え、教育実習から帰ってきた学生たちから、「楽しかった」「教員を目指す気持ちが固まった」などの嬉しい声も届き始めています。各学部の先生方や事務担当の皆さまには、さまざまな面で大変なご尽力をいただいておりますが、実習から得るものは、教員を目指す目指さないに関わらず、彼らの人生を確実に豊かにしてくれると思います。どうぞこれからも、学生たちへのサポートを、引き続きよろしくごお願い申し上げます。(広報担当 河野桃子)

